

令和3年3月
国立教育政策研究所教育課程研究センター

全国学力・学習状況調査の最近の活用事例

【教育課程研究指定校（※1）】

- 1 福岡県筑紫野市立原田小学校（算数）
- 2 鹿児島県南大隅町立根占中学校（国語）
- 3 大分県由布市立湯布院中学校（数学）

【研究開発学校（※2）】

- 4 国立大学法人福岡教育大学附属福岡小学校

（※1）教育課程研究指定校事業：幼稚園，小学校，中学校，義務教育学校，高等学校及び中等教育学校等（以下「学校」という。）における教育課程及び指導方法等について調査研究を行い，もって学校における学習指導の改善充実及び教育課程の基準の改善等に資する。

（※2）研究開発学校制度：教育実践の中から提起される諸課題や，学校教育に対する多様な要請に対応した新しい教育課程（カリキュラム）や指導方法を開発するため，学習指導要領等の国の基準によらない教育課程の編成・実施を認める制度。

（注）1～3については教育課程研究指定校からの報告内容，4については「令和元年度プロジェクト研究調査研究報告書『学校における教育課程編成の実証的研究 報告書1 研究開発学校におけるカリキュラム・マネジメントの実践』（国立教育政策研究所）」における研究開発学校からの報告内容に基づき作成している。

【教育課程研究指定校】

1 福岡県筑紫野市立原田小学校（算数）

（1）研究主題

数学的な見方・考え方を働かせる深い学びを目指した指導方法に関する研究
～予習を効果的に取り入れた学習過程と活用問題の開発を通して～

（2）研究目的／特徴

子供自らが数学的な見方・考え方を働かせながら問題を解決できるような授業づくりをしていくために、「①問題に対する自己の考えを持つための、予習を取り入れた学習過程の開発」と「②数学的な見方・考え方を働かせる、現実世界や数学世界の問題の開発」について、研究を進める。

（3）取組内容

○ 「②数学的な見方・考え方を働かせる、現実世界や数学世界の問題の開発」として、全国学力・学習状況調査の問題作成の基本理念及び実際の調査問題をアレンジした活用問題の開発と実践を実施した。その中で、令和2年度全国学力・学習状況調査の問題を使った職員研修を実施した。具体的には、正答率が低い問題の予想や、解答類型の作成及び国立教育政策研究所が作成した解答類型との比較、解答類型を使った児童の学習課題の把握を実施し、子供の思考の流れと数学的な見方・考え方を分析し、活用問題作成や学習指導改善・充実につなげた。

職員研修の充実

学力調査問題

【はなこさんの説明】

2.51 + 0.36 について、0.01 のいくつかを考えると、
251 + 36 = 287 という整数のたし算に表すことができます。0.01 が 287 個分なので、答えは 2.87 です。

ようた
0.75 + 0.9 も、同じように考えることができるのかな。

0.75 + 0.9 について、【はなこさんの説明】と同じように、ある数のいくつかを考え、整数のたし算に表して説明すると、どのようになりやすいか。言葉と式を使って書きましょう。

【設問の趣旨】
0.01 をもとにして、小数のたし算の説明ができる

研修で作成した正答の条件例

① 75 + 90 = 165 (であることを書いている。)
② 0.01 が 165 個分 (であることを書いている。)
③ 答えが 1.65 (であることを書いている。)
④ 言葉と式、両方を使って説明している。

研修で作成した解答類型例

番号	解答例	正答
1	①、②、③、④の全ての条件を満たしている。	◎
2	③は書いているが、①、②の説明がない。	
3	①、②を書いている。	
4	①、③または②、③を書いている。	
5	①だけまたは②だけを書いている。	
6	①の0.9が90であることを書いておらず、②が誤っている。	
7	①、②、③は書いているが、言葉を使って説明できていない。	
99	上記以外の解答	
0	無解答	

(出典：令和2年度教育課程研究指定校事業研究協議会資料)

（4）取組の成果

○ 上述（3）の取組を通して、自分たちが考える子供のつまづきや正答のために必要な数学的な見方・考え方を教職員自身が捉え直すことができた。

2 鹿児島県南大隅町立根占中学校（国語）

（１）研究主題

社会を生き抜く確かな学力を育成する授業の創造 ～国語科における思考力・判断力・表現力等の育成～

（２）研究目的／特徴

語彙や「読むこと」における文章の解釈などについて、これまでの全国学力・学習状況調査の結果に見られる課題等を踏まえた指導の改善・充実を図るとともに、言語能力の向上に向けて、他教科等との関連を踏まえた指導の工夫に視点を当てた取組を進めている。

（３）取組内容

- 本校の課題を明確化させるための分析においては、これまでの全国学力・学習状況調査の結果に見られる課題等の分析から、「読むこと」における文章の解釈などについて課題が見られた。更なる小問ごとの分析を行い、手立てが必要な生徒に着目した授業展開を行うようにした。
- 思考力・判断力・表現力等の育成を目指す授業実践においては、平成30年度の授業アイデア例をもとにした授業実践を行った。授業アイデア例そのものへの取組に加え、授業アイデア例の学習の流れを参考にした教科書教材による指導の工夫を行った。
- 評価問題の工夫として、誤答の状況を把握し、次の指導につなげられるよう、解答類型の作成・分析を行った。

各自で問題に取り組んだ後・・・



答えにたどり着くまでの過程を、お互いに説明し合う

（出典：令和2年度教育課程研究指定校事業研究協議会資料）

（４）取組の成果

- 「読むこと」領域において、文章の構成や展開に留意して読み、必要な情報を捉えることに課題があることが改めてわかった。
- 解答類型を作成することで、育成を目指す資質・能力をより意識した授業づくりにつながるとともに、解答類型を用いて分析することで、今までは漠然としていたその後の指導の手立てが明確になった。また、他教科等でも解答類型を伴った評価問題を作成し、同じつまづきが出ないようその後の指導の手立てに生かすことができた。

3 大分県由布市立湯布院中学校（数学）

（1）研究主題

主体的・対話的に学び、豊かな表現力と突破力を持つ集団の育成 ～数学的な見方・考え方を働かせる機会を意図的に設定し、数学的活動を工夫した授業づくりを通して～

（2）研究目的／特徴

- 全国学力・学習状況調査における多くの設問について、大分県及び全国の水準を下回る結果となっている。また、調査結果をエビデンスとして指導改善の具体に結びつけることができず、平均正答率の高低の解釈に留まっている。
- 調査結果とともに国立教育政策研究所が公表している分析結果について解釈し、授業等での指導に役立てる方法について開発的に研究する。また、分析結果を、調査を受けた当該生徒のみならず3年間の指導において具体の指導改善へつなげるための方略について研究する。

（3）取組内容

- 過年度に実施された全国学力・学習状況調査の分析及びレディネステストの実施・分析を行うとともに、数学の学習に関するアンケートの実施・分析を行い、生徒のつまずきを意識した単元指導計画の作成を進めた。
- 日常生活や社会の事象を取り上げ、生徒が問題を見いだす機会を設定するとともに、生徒の反応を予想して発問、問い返しを準備し、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を工夫した授業づくりに取り組んだ。

（2）図1のように五角形の外側に点Pをとり、図2の六角形をつくらせ、頂点Pにおける内角は 120° になりました。

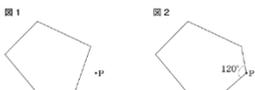


図2の六角形の内角の和は、図1の五角形の内角の和と比べてどうなりますか。下のアからオまでの中から正しいものを1つ選びなさい。

図2の六角形の内角の和は、図1の五角形の内角の和より 120° 大きくなる。

図2の六角形の内角の和は、図1の五角形の内角の和より 180° 大きくなる。

図2の六角形の内角の和は、図1の五角形の内角の和より 360° 大きくなる。

図2の六角形の内角の和は、図1の五角形の内角の和と変わらない。

図2の六角形の内角の和が、図1の五角形の内角の和と比べてどうなるかは、問題の条件だけでは決まらない。

【調査の分析結果と課題について】

○多角形の内角の和は頂点の数で決まり、多角形の頂点の一つ増えると、その内角の和が 180° 増えることを理解できていない。(H236(2))

具体の指導に反映させる

○四角形、五角形、六角形…をいくつかの三角形に分けて、内角の和を調べ、表にまとめるなどして、多角形の辺の数や1つ増えると内角の和が 180° 増えることを見いだすことができるようにする。また、多角形と三角形を用意し、付けたたり離したりして、内角の和が三角形の内角の和の分だけ増えたり減ったりすることを理解させる。(H236(2))

【分析結果から考える指導の工夫】

（出典：令和元年度教育課程研究指定校事業研究協議会資料）

（4）取組の成果

- 全国学力・学習状況調査における公開されている問題及び分析結果をもとにして、指導者の経験や勘に頼らないといったエビデンスをもとにした確かな指導を行うことができた。
- 調査の結果及び分析結果から、学習者のつまずきを具体で想定し、授業における発問や手立てに役立て、指導の改善や充実に生かしている。

4 国立大学法人福岡教育大学附属福岡小学校

(1) 研究の概要

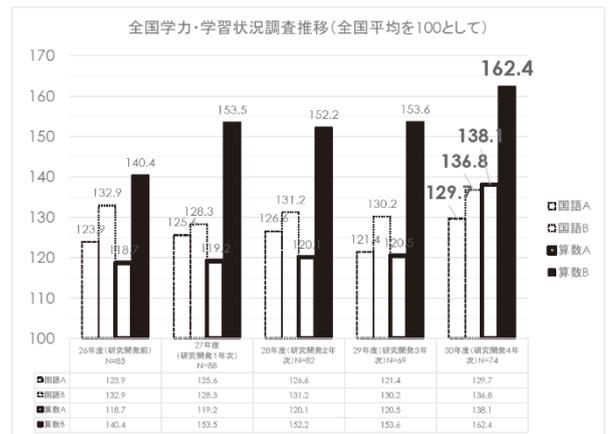
子供の文脈を中心とした人間重視(Human Base)の7領域カリキュラムの開発

(2) 研究目的／特徴

「未来社会を創造する主体」を目指し、「創造性」「協働性」「向上性」の3つの資質・能力をはぐくむため、全教科等を見直し、「にんげん」「くらし」「ことば」「すうがく」「かがく」「げいじゅつ」「けんこう」の7領域と「たんれん」「チャレンジ」の時間によって教育課程を編成する。その際、教科の内容精選を行い、授業時数の削減を進める。

(3) 取組内容

- 教育課程の編成にあたっては、カリキュラム・マネジメントの原理として4つの仮説を立て、編成することとした。(原理1: 子供の文脈を重視した内容の精選, 原理2: 子供自らによる学びの選択, 原理3: 子供の自己内省と省察の重視, 原理4: 内外リソースの活用とPDCAサイクル)
- カリキュラム・マネジメントの実践において、児童の実態把握に取り組むにあたり、全国学力・学習状況調査を活用した。また、カリキュラムの評価では、「人間重視」の教育課程において、内容を精選し時数を削減しても「見える学力」が維持できるのか検証した。



(出典: 令和元年度プロジェクト研究調査研究報告書「学校における教育課程編成の実証的研究 報告書1 研究開発学校におけるカリキュラム・マネジメントの実践」(国立教育政策研究所))

(4) 取組の成果

- 全国学力・学習状況調査結果により、「人間重視」の教育課程にて児童は十分に基礎的な学力を身に付けたことがわかった。特にB問題の向上が著しく、自分の出会った問題に対して粘り強く追究する学習や協働的に問題解決を図る活動、自分のよさや課題を分析する学習によって、学力の向上という成果が表れたものと考えられる。
- カリキュラム・マネジメントの原理1～3が複合的に結びつけられ、子供の主体の学びが子供の力を付けるという成果に至ったのではないかと考えている。